

## 中学英語の教授用資料における発音表記の実態調査

著者	河内山 真理, 有本 純
雑誌名	教育総合研究叢書 = Studies on education
号	11
ページ	57-65
発行年	2018-03-31
URL	<a href="http://id.nii.ac.jp/1084/00000529/">http://id.nii.ac.jp/1084/00000529/</a>

# 中学英語の教授用資料における発音表記の実態調査

## English Pronunciation Transcription in Teacher's Manuals for Junior High Schools

河内山 真理\*      有本 純\*\*  
Mari KOCHIYAMA      Jun ARIMOTO

### 抄 録

本調査は、中学校の検定教科書に付随する教授用資料において、発音がどのように記載され、その指導法がどのように説明されているのかを調べたものである。対象の教授用資料は、教科書と同じ体裁で赤字や青字で注意や説明が掲載されているTeacher's Bookと、詳しく解説が載っている解説編である。その結果、6種類の検定教科書の教授用資料が、少しずつ異なる表記法を用いており、同じ教科書の教授用資料でも説明が一致していなかったり、説明が不十分や不適切と考えられる例が散見された。発音の具体的な指導法は、生徒にわかるように説明する例が少なく、教員が教授用資料をもとに発音指導をするのは心許ないと言える。授業の中で発音指導に割ける時間は少ないと考えられるが、生徒に説明する指導例が増やされること、教授用資料内での説明の統一などの改善が求められる。

### I はじめに

#### 1. 学習指導要領の発音指導

現行の中学校英語の学習指導要領は、コミュニケーション能力の基礎を育成することを目標としている。コミュニケーションの重要な要素となる「音声」について、学習指導要領「(3) 言語材料ア音声」では、次の5つを示している。

- (ア) 現代の標準的な発音
- (イ) 語と語の連結による音変化
- (ウ) 語、句、文における基本的な強勢
- (エ) 文における基本的なイントネーション
- (オ) 文における基本的な区切り

2020年に新学習指導要領が完全実施となるが、音声指導に関しては、現行の学習指導要領とあまり変化が見られない。学習指導要領での音声指導項目の変遷については、大嶋・谷口・多良(2006)

---

\* 関西国際大学教育学部 教育総合研究所学内研究員

\*\* 関西国際大学教育学部 教育総合研究所学内研究員

に詳しくまとめられている。現行の学習指導要領が示す「現代の標準的な発音」は、1997年の学習指導要領から登場したが、それまでは「現代のイギリスまたはアメリカの標準的な発音」という表現が使われていた。しかしながら、「現代の標準的な発音」とは「多様な人々とのコミュニケーションが可能となる発音」となっており、具体的なモデルは示されていない。現代の英語は、国際的に使用され、公用語として使用される英語にも、アメリカ英語、イギリス英語、オーストラリア英語、シンガポール英語など、音声や語彙などそれぞれが特徴を持っている。Englishesと複数形で使われることもある。実際に、TOEIC®でもリスニング・セクションにイギリス英語、アメリカ英語、カナダ英語、オーストラリア英語の4種類が使われている。日本で用いられている英語教材はアメリカ英語が圧倒的に多いが、General Americanが標準的な発音なのか、学習指導要領では明言されておらず、曖昧にされている。つまり発音のモデルにする英語は、コミュニケーションが可能であれば、多様性を認める「国際語としての英語 (EIL) 発音」ということである。

具体的な指導項目としては、話すことに関して「強勢、イントネーション、区切りなど基本的な英語の音声の特徴をとらえ、正しく発音すること」となっている。学習指導要領解説では、この項目に対して「英語で自分の考えや気持ちなどを正しく相手に伝えるためには、正しい発音を身に付けることが大切である。強勢やイントネーションなどの声の調子は、話し手の感情を表すだけでなく、話そうとする言葉の意味にも影響を与えるからである。」となっている。

一方、聞くことに関して、「自然な口調の英語を聞くこと、また、正確に聞き取ること」とあり、「「自然な口調」の英語とは、現代の標準的な発音で正しい強勢、イントネーション、区切りを伴い、適切な速さで話されたり読まれたりする英語のことである。」と解説している。

モデルは曖昧なものの、英語の発声や正しい発音の仕方を理解させ、練習させる必要性や、日本語との違いに留意することなども述べられ、具体的な学習項目として、連結による音変化、語・句・文における基本的な強勢、文の基本的なイントネーション、文における基本的な区切りが示されている。また、音声指導に当たっては、「補助として発音表記を用いて指導できる」となっているが、発音記号を用いるかどうかは、個々の教員の裁量に任されている。

モデルとする英語は不明だが、「正しい発音」で適切な音変化・強勢・イントネーション・区切りを伴った英語を話せるように指導することが求められている。

## 2. 教科書での扱い

学習指導要領での指導項目に従って検定教科書は構成されているが、「現代の標準的な発音」を指導するために、実際にどのような項目が扱われているだろうか。

上田・大塚 (2011)では、平成17年検定済み教科書について、学習指導要領に基づいた発音記号、強勢、イントネーション、音声変化、区切りの扱い方を調べ、各教科書によって発音の扱いに差があることを指摘している。教科書間の音声指導項目における重点の置き方や記号の使用などの差異が非常に大きいという結果であった。また、上田・大塚 (2014)では、学習指導要領の改訂を受けて、平成24年からの教科書を、発音、音変化、強勢、イントネーション、区切りにスピーチ指

導を加えた6項目で調査し、学習指導要領で変更のあった発音、イントネーション、スピーチ指導には説明が増えるなどの変化がある一方で、音変化、強勢、区切りについては変更されていないとしている。しかし、依然として教科書によって差があり、特に個別音の指導で偏りがあることを明らかにしている。この差は授業を実施する教員によって補うことが可能ではあるが、発音は、授業での時間的制約、教員の発音指導への自信のなさの理由で、あまり指導されていないのが現状である(有本2007; 菊池 2005; 手嶋 2011)。

学習指導要領では発音指導の補助として発音記号を使うことができるとされているが、この発音記号について、学習者が体系的に学習・理解する機会がほぼないことが多くの研究で指摘されてきた(菊池 2010; 河内山他 2011; 柴田他 2008; 静 2012)。しかし実態として、発音記号は、中学校検定教科書では、1年次には各課の新出単語のリストに記載されていないが、2年次からは記載されている。ただし、その発音記号についての説明は、1年次の教科書巻末に唇や口形図と一緒に説明してあるものや、単語例と共に記載しているものもあれば、一覧はあっても発音の方法についてはまったく説明がないなど、教科書間での差が大きい。その上、各教科書で使用されている記号にも差がある(小川 2002; 上田・大塚 2011)。各教科書によって発音の扱いに差があることは、すでに指摘されている(上田・大塚 2010; 2014)。

## II 調査の目的と対象

中学校で用いられる検定教科書の差異は、教授者が授業内で補って指導することが可能である。では、教授者が参考として用いる前提で編集されている教授用資料では、どのように発音指導を扱っているのだろうか。本調査では、6種類の中学校検定教科書の教授用資料について、発音指導の項目や内容を調べた。教授用資料は、各学年別に、Teacher's Manualとして各種ワークシートなどの複数冊子がセットになっているが、本調査では、教科書と同じ体裁で指導項目や解答例が記載されているTeacher's Bookと、指導の方法等が載っている解説編を対象とし、ティーム・ティーチングやワークシート等について記載されている冊子は対象としていない。

調べた教授用資料とは、*New Horizon (NH)*, *New Crown (NC)*, *Sunshine (S)*, *Total English (TE)*, *One World (OW)*, *Columbus21 (C)* の6種類である。

## III 結果と考察

教科書本体でも発音指導の扱いには差があったが、教授用資料でもかなりの差があることがわかった。個別の音や発音記号に対する説明も、かなり専門的な説明が記載されている場合もあれば、まったく触れられていないものもあった。同じ教授用資料の中で、同じ発音記号に対して異なる説明が書かれており、不統一になっていることもあった。発音記号や用語についても、教授用資料によって差が大きい。


### 1. Teacher's Book

Teacher's Book は生徒が持つ教科書に、赤や青などの小さな文字で指導上の注意点や解答などが

記載されている本であり、外見は教科書と同じである。2年生から発音記号が生徒用教科書に記載されるため、1年か2年次で扱う必要があると考えられる。綴り字と発音の関係と、それぞれの音をどう発音するかを教えなければならない。綴り字と発音についてはフォニックスを用いて一覧にまとめているものが多いが、そこで使われる発音記号の調音方法について説明があるのは3種類の教科書に留まっている (NH, NC, S)。





Teachers' Book では、1年次の教科書では各課の新出単語の横に生徒用には記載されていない発音記号が示してあるものもあった (NC) が、他は示していない。

学習指導要領で示されている連結、強勢、イントネーション、区切りについては、Teacher's Book に示されていない場合もあった。また、示してあっても教科書により記載方法に差が見られた(表1)。

イントネーションに関しては、本文すべてにイントネーションの記号を付けているもの (NH, S) や、主要な文にのみ付けているもの (NC, C) の2通りがあった。しかし、記号は矢印で上昇調と下降調の2種類のみである。連結を表示している場合は、 を使っている。文強勢については、第1・2強勢の2段階 (NC, S, TE) と第1強勢のみ1段階 (OE, C) の2通りがあり、さらに用いる記号も ' と " の斜め線を文字の上に付けている場合 (NC, S), 小さい黒丸と楕円の黒丸で用いているもの (TE), ▼ で示す (C) の3種類が存在した。ポーズも、2段階表示と1段階表示があり、さらに斜め線 /, // (NC, TE) と縦線 | (S) の2種類の記号が使われていた。

これらの記号は、各指導書でばらばらに用いられており、英和辞典で用いられる記号とは異なっている。一部で強勢を示すのに用いられている ' と " は、" がより強い強勢を ' が一般的な強勢を示すのに用いられ、母音の上に付けられている。日本の出版社が編纂している一般的な英和辞典、たとえば中高生用の電子辞書で多く採択されている *Genius* 英和辞典等では、' が第1強勢で、" が第2強勢を示し、母音の上に付けられている。文強勢を示すため、英和辞典での単語内の記号とは変えているのかもしれないが、国際的には一般的な表記ではない。また、*Longman* や *Oxford* 等の英米の出版社による英英辞典および発音辞典では、強勢のある音節の前に | で示されることが多いという違いがある。以上の結果を表1にまとめた。

表1. Teacher's Book で本文に追加されている音声情報とその記号

出版社	NH	NC	S	TE	OE	C
イントネーション	文全体 全文 	文末・句末;重要箇所 	文末・句末 全文 	—	—	文末・句末 ;重要箇所 
連結	—	○ —	○ —	○ —	○ —	○ —
文強勢	イントネーションで表示	2段階 'と"	2段階 'と"	2段階円・楕円	1段階 '	1段階 ▼
ポーズ	— (イントネーションから類推可)	○ /と//	○ 	○ /	—	—

以上の不統一の原因は、教科書編纂者の意図ではなく、指導書を作成する各出版社の編集部の方針によるものと推測される。教科書の編纂者は公開されているが、指導書の執筆者は示されておらず、教科書編纂者以外が携わっている可能性が高い。

## 2. 解説編

### 2.1 記載項目

1年生用の指導書の解説編の巻頭または巻末に編集方針あるいは指導上の留意点として、発音についてまとめて解説があるものとないものがある(表2)。

表2. 音声についてまとめた解説の有無

出版社	NH	NC	S	TE	OW	C
まとめ	○ 発音について	△ 編集方針の 音声の項目	○ 音声指導上 の留意点	—	○ 発音記号の表 記と音声指導 について	○ 発音記号に 関する方針
分量	5 頁	1/3 頁	4 頁	—	2 頁	1.5 頁

発音の記載がある場合でも、分量も1/3頁から5頁という差があり、内容にも質的な差がある。子音や母音などの個別音について、日本語と英語の音の違いから、修得しにくい音の調音の仕方などを解説しているもの(NH, NC, OW)、発音記号で羅列してはいるが調音法には触れていないもの(S, C)などの差がある。他の記載内容も、発音表記の編集方針を述べている場合(NH, NC, OW, C)、発音の目標とすべきモデルについて言及している場合(NH, OW, C)、リズムに言及している場合(S, OW3種類)、イントネーションの説明(NH, S, OW)、ポーズや外来語に言及している(S)など、ばらつきが大きい。ただし、まとめのところでは触れていなくても、各課の解説で必要な項目に説明を加えていることもある。

語句を区切っている綴り字と発音について一覧表にまとめていても、その音をどのように調音すればよいのか説明がないもの、調音法を口腔図入りで説明しているものもあれば、綴り字と発音記号の対応、その音を含む単語例しか記載していないものもある。仮に、教員が英語音声学の知識を十分に持っていない場合は、指導書に調音法の説明がない場合、発音指導にも問題が生じるであろう。

教授用資料が、各課の指導頁で扱っている事項を表3に示す。発音という項目を作っている場合もあれば、個別に解説している場合もあった。概ね、その課で特に扱いたい音声項目について解説しており、連結などの音声変化や調音法を扱っている。ただし、発音を解説するのに用いている表記はカタカナが多かった。

表3. 各課での音声指導に関する記載事項

出版社	NH	NC	S	TE	OW	C
項目	発音の項目 音調・調音法	音声指導のポイント ex. 連結や調音法	音声の解説 ex. リズム, 音調, 弱形, 調音法 (気づきのポイント等)	留意事項や解説で触れる ex. 音調, 連結, 弱形	脚注音声コーナーの解説 ex. 連結, 調音法	音声の解説 ex. 調音法, 音声変化, 強勢等
表記	カタカナ	カタカナ	発音記号	発音記号 + カタカナ	カタカナ	発音記号 + 一部カタカナ

共通する表記方法としては、生徒に指導するためだと推察されるが、連結や脱落などの音声変化がカタカナで表記されている例も多かった。たとえば、music は「ミュージック」ではなく「ズィック」である (NH) とか、have a の連結は<ハヴァ>のようにつなげて言う (NC) などである。that it's に対して「ザーリツ」という表記もあった。このカタカナ表記では音声変化はわかっても、日本語にない th や v の音は伝わらない。指導者がそれを日本語にはない音だと認識し、そのように授業で伝えれば問題は起こらないが、このままカタカナでの説明を生徒にも使ってしまうと、目標である音声変化以外の箇所も「カタカナ」で認識してしまう恐れがある。このように、カナ表記による問題点がかなりあることが判明した。

また、いくつかは不適切あるいは記載ミスと考えられる説明も存在した。[t]の音で終わる語のあとに you や your などが続く場合、音がつながって別の音「チェ」のようになることがある (OW) や、日本語にない[θ]の調音について説明した箇所で、語末の破裂は弱くなる (C), [ei] の発音を、「エー」のように伸ばさず「エイ」とはっきり発音する (S) などである。実際には、[tj+j]はここでは「チェ」ではなく「チュ」の方が近く、[θ]は破裂音ではないし、また二重母音のそれぞれの音をはっきり言ってしまうと二重母音にはならない。

## 2.2 修正すべき説明

解説編での問題は、記載に差があることに加えて、説明が教員向けのみで、肝心の生徒にどう説明し、指導するかがあまり記載されていない点である。

音声指導について、例えば [æ] の調音について、以下のように記載されている。

NH: 「エ」の口の形のまま「ア」と発音させる

NC: 口を横に開け、「エ」の口形をつくり、そのまま「ア」と発音する。感覚的には「エ」と「ア」が同時に発音される音となる。この音は a という母音字にストレスがある時に出現し、高く、長く発音される特徴がある

S1: 「え」と「あ」の中間的な発音、口を横に開きながら「エ」の形をさせて「アー」と若干長

めに発音させる。親指と人差し指で口の両端を横に広げるようにするとよい

S2:日本語の「ア」に類する発音。もっとも前方の母音で長めに発音される。少し顎の位置を下げて唇を横に開けて[e]を強く言う

「エの口形でア」という指導をしても、実際のところ[æ]は調音できない。口を横だけでなく縦にも開ける音であるため、下あごを下げる必要があり、S1、S2の説明が妥当だと考えられるが、S2はかなり専門的な説明になっており、生徒向けにはS1が適している。

個別音だけでなくプロソディについても、説明が不足している。イントネーションについて、例えばNCでは、主要な音調として「下降調(full-fall)」、「上昇調(full-rise)」、「下降上昇調」、さらに「半上昇調(half-rise)」があると説明しているが、その後下降上昇調の例は全く出てこない。Sでは、イントネーションが多様であると言いながら「上昇音調」と「下降音調」の説明例しかない。また、イントネーションの変化に焦点を当てながら、

Nice to meet you, (↗) Yuki. (↘) (解説編)

Nice to meet you, |Yuki.↗ (Teacher's Book)

のように、解説編には記載して「矢印で示した音調とリズムに注意」とまで書いてあるのに、Teacher's Bookでは文末のイントネーションしか示されておらず、この2冊で連携が取れていない箇所もあった。

以上のような誤りについては、精査する必要がある、現場での混乱を招かない為にも、修正すべきであることを提言しておきたい。

#### IV おわりに

検定教科書や教授用資料に差があっても、指導者である教員が、授業内で補いながら音声指導を行うのが望ましいが、大学の教職課程およびその後の研修で音声指導について十分に学んでおらず、知識にも指導にも自信がない場合、音声指導は教授用資料の記述を頼りに行われるか、教室での指導が十分に行われない可能性がある。

教授用資料では音声指導の具体的な方法が示されていないことがあり、もっとも教員が必要としている情報が欠けている。また、音声学用語を用いて専門的に説明している場合は、記述は正しいのだが、音声学の知識がない場合、教員にとって理解が難しく、生徒にどう伝えたらよいかかわからないままである。生徒に伝えるという姿勢で、平易なことばでどのように伝えるかを示すべきであろう。生徒への具体的な指導例や方法、うまくいかないときの対処法(矯正指導法)などを示すと、音声学の知識に自信がない教員でも指導しやすくなるので、これら指導書の改善が望まれる。

また、教科書は公立学校の場合は各自治体で採択が決定されているが、Ⅲで述べたように記号など表現方法が教科書によって異なっているため、異なる出版社の教科書を用いる際に教員が混乱し、困難を感じる可能性もある。また参考に教授用資料以外を用いたときに、教科書独自の特殊な記号は汎用性がなく、教室での指導には役に立たない。あるいは別の意味で用いられていることもあるため、いつその混乱を招く事態にもなりかねない。教科書と、教授用資料の筆者は、一致し



ていないためだと考えられるが、各出版社が編集段階で精査するなどの改善が期待される。

＊本稿は、2017 年 8 月に開かれた外国語教育メディア学会第 57 回全国研究大会（名古屋学院大学）で発表した内容を加筆・修正したものである。また、本研究は、科学研究費助成事業（基盤 C16K02869）の助成を受けている。

## 参考文献

- 有本 純 (2007). 「発音の学習と指導」 河野守夫（編）『ことばと認知のしくみ』 東京；三省堂, 265-273.
- 菊池 武 (2005). 「大学入学前の英語の発音指導の現状」『いわき明星大学人文学部研究紀要』第 18 号, 149-159.
- 菊池 武 (2009). 「発音と英語力」『獨協大学外国語教育研究』第 27 号, 59-86.
- 河内山真理・山本誠子・中西のりこ・有本 純・山本勝巳 (2011) 「小中学校教員の発音指導に対する意識—アンケート調査による考察—」『外国語教育メディア学会関西支部研究集録』第 13 号, 57-78
- 河内山真理・有本 純 (2017) 「中学校英語教授用資料における発音指導の扱い」『外国語教育メディア学会 第 57 回全国研究大会 発表予稿集』174-175.
- 中村 聡 (2012). 「日本語母語話者が習得すべき国際英語の発音基準—大学英語教育の場から考える—」『コミュニケーション文化』第 6 号, 168-174.
- 小川直義 (2002). 「教育的発音表記について」『英語音声学』(5), 389-403
- 大島秀樹・谷口雅基・多良静也 (2006) 「学習指導要領の変遷にたどる音声・発音指導—モデル、学習内容、学習指導観—」『第 6 回日本音声学会九州沖縄四国支部研究大会』56-65.
- 柴田雄介・横山志保・多良静也 (2008). 「音声指導に関する教員の実態調査」『四英語教育学会紀要』28, 49-55.
- 静 哲人 (2012) 「「教職入門」および「英語科教育法」の受講効果の検証—発音指導と英語教師に関するビリーフの変化を追う—」『埼玉大学紀要』, 61(1)41-56.
- 田辺洋二 (2003). 『これからの学校英語—現代の標準的な英語・現代の標準的な発音—』東京；早稲田大学出版部
- 手島 良(2011) 日本の中学校・高等学校における英語の音声教育について—発音指導の現状と課題—, 『音声研究』第 15 巻第 1 号, 31-43.
- 上田洋子・大塚朝美 (2011). 「発音と音声のしくみに焦点をあてた中学校英語教科書分析—インプットの基礎を考察する—」『大阪女学院大学紀要』7, 15-32.
- 上田洋子・大塚朝美 (2014). 「中学校検定教科書における音声指導項目の分析—新学習指導要領での扱いの変化について—」『大阪女学院大学紀要』10, 1-15.

## Abstract

Pronunciation teaching is one of the most important factors to teach communicative English. However, students do not get enough knowledge about pronunciation in English classes because of the lack of teachers' knowledge and confidence, or time limitation. In Japan, the Course of Study decides what to teach in the class, and textbooks follow it. It picks up standard pronunciation, stress, rhythm, intonation, and pause. When teachers prepare for the classes, they check teacher's manuals of textbooks. This paper focuses on the pronunciation instructions and explanations in teacher's manuals that textbook publishers make for teachers. The manuals usually consist of 5 or 6 books including a teacher's book, manuals for teaching, team-teaching plans, and worksheets, etc. In this study, teacher's books and manuals are examined and the following results are found. All books treat the five items that the Course of Study requires. However, each publisher uses its own symbols to show phonetic features. Comments are mainly for teachers and sometimes too difficult without knowledge of phonetics. Some have incorrect or inappropriate descriptions, which may confuse teachers and students. The manuals should have more information on how to teach students English pronunciation.